



短編
「はい、よろこんで



20230831



エリー



目次

本文	1
----------	---

本文

1、生まれる前

時折赤黒く光る世界で、僕は夢を見ていた。
巨大な緑色の生き物と歌っている夢。
とても幸福でいつまでも続くと信じていた。
けれども世界は終わりを告げる。
痛みと共に目覚めた。

2、村

僕は山奥の村に生まれ落ちた。
ニニーという魔法の改革で、6歳までは村の子どもとして与えられたものを受け取るだけ。
同い年のミルリーは、お菓子が買いたくて、早く半人前の7歳になりたがった。
僕はどうしてもよかった。
あの満ち足りた歌がもう一度聞きたくて、暇さえあれば眠りについていて。
けれども何の夢も見ない。
ただ時間だけが過ぎていく。

3、ミルリーの旅立ち

独立資金を貯めたミルリーは、13歳で街に出た。
僕は急に焦り出す。
そして村の相談役の老いた魔法を訪ねる。

4、暗示

魔女は言った。

「はい、よろこんで」

全てにそう答える暗示をかければ、運命は変わるだろう。

なぜなら、行動するしかなくなるから。

僕は迷った。

「死ねと言われたら死ぬんですか？」

魔女はうなずいた。

「だが、お前にそんなひどいことを言う人がこの村にいるのかね？」

僕が寝ていても意地悪言う人はいない。父が時々、「道具の手入れをしろ」と言うくらいだ。

極端なことをしなければ、変われない気がした僕は決意した。

「暗示をかけてください」

魔女はペンダントを取り出した。

透明な光る石がついている。

「石を見つめなさい」

左右に揺れる石を見ていたはずなのに、気づいたら家の布団で寝ていた。

5、初めての挑戦

外は暗くなっていた。

玄関に行くと、父親が畑仕事から帰ってきた。

「たまには道具の手入れをしておいてくれ」

「はい、よろこんで」

明るく調子外れな大声に、僕自身も驚いた。

父は僕以上にびっくりした。

そして大爆笑した。

「まるで酒場の店員だな。いい返事だ」

道具を渡すと僕を見守った。

(1D100 は 49 で成功)

僕はなんとか磨くことができた。

「いいだろう」

父は満足そうにうなずいた。

6、なにになる？

何を言われても、「はい、よろこんで」と言う僕をみんなからかい出す。

(1D6で3)

みんなから逃げるために、子どもたちが帰った後の教室に隠れた。

すると教師が現れた。

「ここに隠れるなら勉強しなさい」

僕は読み書き計算を初めて習った。

最初は子どもたちに混じって習う側だった。

次第に教えることが増えた。

そして教師になった。

魔女の暗示は強力で今でも解けてない。

「はい、よろこんで」

今でもすべて引き受けてしまう。

でもそれでいい。

あの巨大な緑色の生き物、グリーンさまの歌が、引き受ける度に聞こえてくるから。

僕は人生から歌を取り戻した。

短編「はい、よろこんで」20230831

著 ELYE

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
